

新学習指導要領に向けての授業実践 I

— 近現代の文学作品を入り口にした親しみやすい漢詩・漢文の学習 —

富永 一登 小川 恒男 朝倉 孝之 岡本 恵子

1. はじめに

兼好法師は、『徒然草』に「ひとり灯火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むるわざなる。文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。」(第十三段)と記している。文といえば、『文選』『白氏文集』『老子』『莊子』などの中国古典だったのである。言うまでもなく、古来、中国の古典である漢文は、日本の古典ともなり、日本語・日本文化そのものであり続けた。明治以降も、夏目漱石・森鷗外・芥川龍之介など、ほとんどの日本文学の根底には常に漢文があり、漢文は、日本人の教養そのものであった。

日本で最初にノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、色紙に「知魚楽」と記していたという。それは『莊子』秋水篇にある話であり、博士の「知魚楽」と題する文章(『湯川秀樹著作集』6「読書と思索」、岩波書店)は、国語の教科書にも掲載され、中・高校での学習を通して、多くの人々が科学と漢文を自然と関連づけることができた。

湯川博士は、自伝『旅人』(角川文庫)にも漢文を学んだことを記されているし、『本の中の世界』(岩波新書)には、素粒子のことを考えていて、『莊子』応帝王篇の渾沌の話の思い出したことを記し、

科学は主としてヨーロッパで発達してきた。広い意味でのギリシャ思想がもとにあって、それを受けついで発達してきたのだといわれている。……過去から現在までは大体そうなのだから、それでいいでしょう。しかし、これからさきのことを考えてみると、何もギリシャの思想だけが科学の発達の母胎となる唯一のものとは限らないだろう。東洋をみると、インドにも古くから、いろいろの思想があった。中国にもあった。中国の古代哲学から、科学は生まれてこなかった。たしかに今まではそうであったかもしれない。しかしこれからさきもそうだとときめこむわけにはいか

ない。

と述べられている。漢文は、科学研究においても思考の基盤となると考えられていたのである。

しかし、残念ながら、経済性・効率化が優先され、応用的な科学技術に注目が集まり、直接的な有用性を見いだせない人文学が軽視される傾向が強まる中で、国語、とりわけ古典や漢文はほとんど顧みられなくなってしまった。その結果、漢字が読めない人が政界や財界のリーダーになるに至っている。学問の府である大学においても、社会に即有用なものが幅をきかせ、基礎学が軽視されている。これは文化国家にとって危惧すべき状況である。自国の言葉や文化をしっかりと身につけなければ、真の国際人たり得ないし、人間の思考能力の向上には、言葉の力は欠かせない。数十年の間に、このような事態を招いたことには、中国文学を外国文学として位置づけることに熱心なあまり、漢文は古くさいと軽視し、日本語の基礎であったこと忘れがちだった中国文学研究者や、国語の必要性・重要性を十分に普及できなかった国語教育関係者にも責任のいったんはある。

今回、従来の活動に対する反省も含め、漢文は決して外国文学ではなく、国語に欠かせない、身近なものであることを中・高校生に認識してもらうために、「近現代の文学作品を入り口にした親しみやすい漢詩・漢文の学習」という課題を設定し、漢文教材の開拓を目指す新たな試みを始めることにした。

古典には、「今読む」という視点が大切である。詩人の長田弘は、『すべてきみに宛てた手紙』(晶文社)の「手紙7」中で、次のように述べる。

本のもつ魅惑は、本のもつ「今」という時間の魅惑です。……

書を読むに、古き事の跡を古き書の上にて視、古き人の説を古き書の中にて聴くとおもへばおもしろからず、今ある事今ある人の上なりとおもひて読めば近々と明かに其跡其説も心に映る

ものなり。

そう言ったのは、幸田露伴でした。

今ある事今ある人の上なりとおもひて読むとは、その本の中に生きている「今」という時間を読むということです。一冊の本がみずからその行間にひそめるのは、その「今」という時間のもつ奥ふかい魅惑です。

そして、「手紙2—こころざし」では杜甫の詩が、「手紙6—ふみよむあかり」では江戸漢詩や鴉外の詩が引かれている。また、森本哲郎『ことばへの旅』(上・下、PHP文庫)には、「人間の本性について」「ふるさとについて」「友人について」「風流について」「ものの見方について」「自適について」「イメージについて」等々、数多くの漢詩・漢文が引かれている。これらも漢文教材の一つにできるのではなからうか。

すべての教科の基本は国語である。国語の力が備わっていれば、必然的に外国語や数学、理科の力も向上するはずである。今回の試みが、親しみやすい漢詩・漢文の学習に発展し、漢文の魅力を広める一助になれば幸いである。(富永一登)

2. 素養としての漢文

中国語を初めて習う学生に向かって、我・愛・你・不の4つの単語を示し、『「私はあなたを愛していない。』を中国語に訳しなさい。』と問うと、大部分は苦もなく「我不愛你。」と答える。しかし、自分がそう答えられたことを不思議だとは思わないらしい。同じ学生たちに、「犬」を「いぬ」と読むことの奇妙さを説明しようとする、今度はなかなかうまく伝わらない。彼らも「dog」を「ドッグ」とは読んでも「いぬ」とは読まないだろうに。

古井由吉が「日本語の精妙さ」について、「しかしもう少し深く取ると、日本国こそバイリンガルだ、ともいえるのです、古来。一方に和文がある、そして他方に漢文があり、そして漢字漢語にたよる文章があります。漢字とは外国の文字です。これをいちいち和文、和語に変換しながら、われわれは生活を営んでいるわけです。…(中略)…。しかも、漢字には一字の内にいろいろな意味が総合されている。われわれは読取るために、そこから一つの意味を分析して引き出してくる。これは翻訳です。それを常にやっているのです。そうやって日本語という言語が成り立ってきた。これを忘れると日本語は失われるかもしれない。日本語とは、そういう二重言語です。」と指摘する。漢字は外国語である中国語を表記するための文字であり、漢文は本来中国語の書き言葉なのだが、漢字漢文があまりにも違和感なく日本語の中に溶け込んでいるために、

普段の我々は日本語が「二重言語」であることをほとんど意識しない。「教育」は外来語だなどと言うと、学生たちは奇妙な顔をする。意識しなければ、漢字漢文が日本語の中で果たしている役割を発見できないのである。

漢字・漢文が「日本語の精妙さ」をその根底から支えてきたことは確かであったにしても、「券売機」や「熱中症」など中国語の文法から逸脱した語が定着するようになった今日、その事実さえ揺らぎ始めたと考えるべきなのかもしれない。日本の現代文学に漢文からの影響をより直接的な形では見出し難くなっていること背景には、そのような揺らぎがあるのだろう。

明治以降の日本近代文学には、次に挙げる例のように、漢文の反映を容易に見出すことができる。

紅蓮白蓮の香ゆかしく衣袂に裾に薫り来て、浮葉に露の玉動ぎ立葉に風の軟吹ける面白の夏の眺望は、赤蜻蛉菱藻を颯り初霜向ふが岡の樹梢を染めてより全然と無くなつたれど、……。

(幸田露伴「五重塔」明治25年)

しかし画に出来ない情を、次には詠って見たい。あれか、これかと思ひ煩った末とうとう、独坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。会得一日静。正知百年忙。退懷寄何処。緬邈白雲郷。と出来た。(夏目漱石「草枕」明治39年)

露伴の場合は、江戸の戯作文学を介して、文体自体が漢文脈を色濃く残しており、漱石では作中人物がいきなり漢詩をひねってみせる。当時の読者は漢文の素養を要求されたことだろう。それも現代の尺度からすればかなりのレベルの素養をである。明治という時代が江戸漢学の伝統を土台に空前の漢語ブームを迎えていたからこそ、漢文が素養となり得たのだろう。

中島敦の「山月記」「李陵」などを読むと、昭和に入っても、少なくとも戦前までは、素養としての漢文はまだまだ余喘を保っていたことが分かる。作家は読者に漢文の素養を期待してよかったのである。

ところが、戦後、漢文は日本人の「素養」という位置から次第に滑り落ちてきていると言わざるを得まい。平成以降は特にその傾向を著しく強めているような気がする。もちろん、近代と現代とでは文学作品の読者の層に変化があったことは否めない。それでもやはり、漢文は素養ではなくなりつつあると言うべきだろう。このような事態を招いたのには様々な要因があっただろうが、少なくとも漢文が素養とは呼べなくなった時代である今日、「五重塔」や「草枕」のような文学作品は、作り手の出現を最早期待できない。しかし、より重要なことは漢文を素養とする読み手の不在なのではなからうか。

中島敦に「悟浄出世」という小説がある。

そのころ流沙河の河底に栖んでおった妖怪の総数およそ一万三千、なかで、渠ばかり心弱きはなかった。渠に言わせると、自分は今までに九人の僧侶を啖った罰で、それら九人の骸 顛が自分の頸の周囲について離れないのだそうだが、他の妖怪らには誰にもそんな骸顛は見えなかった。

(中島敦「悟浄出世」 昭和17年)

『西遊記』の物語を踏まえるが、その人物造型はあくまでも近代に於ける知識人のそれである。用字こそ常用漢字表に見当たらないものが頻出するけれども、文体は既に漢文脈からはほど遠いように思われる。もちろん『西遊記』のストーリーや登場人物に関する知識があった方がより楽しめるはずだが、「五重塔」「草枕」に比べ読者に対して漢文の素養を要求する度合いはやや低い。

このような中国の歴史や文学に題材を取る作品は、歴史小説、推理小説、或いは幻想小説など、いわゆる中国モノとなって今日に継承されることになった。ここでは中国の歴史を舞台にして実に近代的な人格を備えた登場人物たちが活躍する。作品の主題からは中島敦が描こうとしたような深刻なテーマがほとんど失われ、もっと娯楽性の強い作品が大半を占める。読者は漢文の素養をほとんど要求されない。漢文が素養でなくなった時代に在っては、中国モノは文学の言わば周縁部にしか立ち現われない。近年は更に周縁に位置するゲームやマンガの方が中国モノの供給が多くなっているかもしれない。文学の中心にあらうが、周縁にあらうが、面白い作品は面白い、面白くない作品は面白くない、ただそれだけのことではある。ただ、いくら面白くてもそのような周縁部に位置する作品群を国語教育の場に教材として直接取り上げることは難しいかもしれない。

ここまで述べてきた漢文の素養には、中国の歴史や地理、文化などに関する知識が当然含まれる。しかし、そのような知識の欠乏は、実は漢文が素養でなくなったということの核心ではない。それはむしろ漢字漢語を自在に使いこなす能力の耗弱があるように思われる。漢字や漢語に関するクイズに答えられても、それを使いこなす能力があることにはならない。クイズはクイズでしかなく、活きた言葉の中で漢字漢語を使う訓練にはならないからである。明治の頃のように漢文がまだ素養であった時代には、読者も漢文脈を活きた言葉として読めていたように思えてならない。今日のいわゆる中国モノの登場人物たちは中国の歴史を舞台として動き回るものの、あらかじめ現代に生きる日本人と同じ人格を与えられているのであるから、彼らの

セリフは我々に活きた言葉になっている。漢文が素養でなくなった今、漢文脈もまた活きた言葉なのだということの再確認から始めなければならないのかもしれない。(小川恒男)

3. 学習指導要領改訂に伴う古典の扱い変更のポイント

文部科学省は2008(平成20年)3月28日に小学校学習指導要領と中学校学習指導要領を公示した。高等学校については、2008年12月22日に中央教育審議会において改定案を公表し、翌日から2009年1月23日までパブリックコメントを行う。新しい学習指導要領から読みとれる古典に関わるポイントをまとめてみる。

学指導要領の基本方針をまとめた中央教育審議会による答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学指導要領の改善等について」(平成20年1月17日)において、小学校の古典指導について次のように記されている。

言語文化としての古典に親しむ態度を育成する指導については、易しい古文や漢詩・漢文について音読や暗唱を重視する。

小学校での古典の指導については音読や暗唱が重視される。

中学校・高等学校では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域は維持されたが、「言語事項」は「言語文化国語の特質に関する事項」に改変され、伝統的な言語文化への興味・関心を広げることになった。

中学校における古典の指導には次のように示されている。

古典の指導については、言語の歴史や、作品の時代的・文化的背景とも関連付けながら、古典に一層親しむ態度を育成することを重視する。

高等学校については、国語総合「言語文化国語の特質に関する事項」(1)のア 伝統的な言語文化に関する事項として、次のように示されている。

- (ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係に気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。
- (イ) 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。

以上から、我が国の伝統と文化に関する教育を充実するため古典に関する指導を重視する姿勢を明確に打ち出したのが今次改訂のポイントであるといえよう。

(朝倉孝之)

4. 漢詩・漢文の学習に繋がる文学作品例

1) 散文の場合

【例1】幸田文「ひのき」(『木』より)

→「無用の用」(『莊子』)

……相隣って、並び立ち、同時同所に生まれ、育つて、そして無事に何百年を生きながらえて、一方は恵まれてすすくと優秀に、一方は難を受けて苦痛を堪え、しかも劣級に甘んじなければならぬ。……その檜は、生涯の傾斜を背負って、はるかな高いこずえにいただいた細葉の黒い茂みを、緩く風に揺らせていた。その緩い揺れでも、傾斜の軀幹のどこかには忍耐が要求され、バランスを崩すまいと努めているのだろう。木はものを言わずに生きている。かしいで生きていても、何も言わない。りっぱだと思った。が、切なかった。

高校生に深く考えさせるだけの内容と表現を持った名随筆である。ただ、最後の「切なかった」の含意を教室で味わうのはやや難しい。表面的に受け取って個人に重ねてしまうと誤解を生じかねない。

そのとき全く別の角度から、所謂役に立たない木について述べた「無用の用」をつき合わせると、捉え方に幅が生まれ、逆に素直に受けとめられる。

今子有大樹，患其無用。何不樹之於無何有之郷，
広莫之野，彷徨乎無為其側，逍遙乎寢臥其下。不
夭斤斧，物無害者。無所可用，安所困苦哉。

両者は異質の文章である。それだけに、同じものを見ても全く異なる見方、感性がはたらくことが分かる。立場を変えて考えるヒントにもなる。多様な学習の工夫が可能な組み合わせである。

【例2】夏目漱石「草枕」

→陶淵明「飲酒」詩・王維「鹿柴」詩

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。ただそれぎりの裏に暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向こうに隣の娘が覗いている訳でもなければ、南山に親友が奉職している次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。独坐幽篁裏、弾琴復長嘯、深林人不知、明月来相照。ただ二十字のうちに別乾坤を建立している。…

引かれているのは陶淵明「飲酒」詩、

結廬在人境 而無車馬喧 問君何能爾 心遠地自偏
采菊東籬下 悠然見南山 山氣日夕佳 飛鳥相与還
此中有真意 欲弁已忘言

の一部と、王維の五言絶句「鹿柴」詩である。それを漱石は「葉になる」という。

このように漢詩・漢文が引用されているケースは随筆に多い。高校生に理解しやすい内容ではないが、日本人の精神的土壌としてかつて確かにあった漢詩の影響を知るのには意義深い。現代文の教科書で「現代日本の開化」を読んで高校生が今日的意味をそこに見るような学習が、「草枕」でもできるのではないか。

【例3】芥川龍之介「杜子春」

→李復言「杜子春伝」

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ尽して、その日の暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。……

芥川が古典に材を採った作品であり、子ども向けに良質の「文学」を読ませようとした作品である。いわば定番教材の「羅生門」もあり、比較読みは難しくくない。

漢文では、杜子春は最後に女に生まれ変わり、我が子が殺されようとするとき、ついに声をもらす。

道士前曰、吾子之心、喜怒哀懼惡慾、皆忘矣。所未臻者、愛而已。向使子無噫声、吾之藥成、子亦上仙矣。嗟乎、仙才之難得也。吾藥可重鍊。而子之身猶為世界所容矣。勉之哉。遙指路使歸。

約束を破ったことを恥じた杜子春は再び戻るが、人の気配はなくむなしく引き返すのであった…。

全文を扱うには長いですが、部分的にあらすじでつないで読めば、ストーリーも追いやすく、主題の違いも分かりやすい。芥川の意図も容易に把握できよう。

このような形で漢文から近代小説を生み出した例は少なくない。前出の中島敦「山月記」は高校2年の定番教材である。唐の李景亮撰「人虎伝」に想を得ているものの「人虎伝」が伝奇・怪異譚であるのに対し、「山月記」は詩に囚われた李徴の狂執を、本人の独白に聞き手の哀憐を配して構成された近代小説である。二作品を比較対照することで作者の意図はおのずから明らかになり、そうした授業実践も現代文の授業で行われてきた。

漢文学習の入り口としては「弟子」もよいのではないか。『論語』を単なる箴言集ではなく生きた人間のことばとして読もうとする構えを作ることができるからである。

【例4】『硝子戸の中』(夏目漱石) →『論語』

車夫は筵の中にヘクトーの死骸を包んで帰って来た。私はわざとそれに近づかなかった。白木の小さい墓標を買って来させて、それへ「秋風の聞こえぬ土に埋めてやりぬ」という一句を書いた。私はそれを家のものに渡して、ヘクトーの眠っている土の上に建てさせた。……

飼い犬といい飼い猫といい、家族同然に暮らしていれば情が移る。その死を悼むのは当然である。ましてや孔子の時代、馬は登城にも不可欠な財産でもあったろう。

既焚。子退朝曰、傷人乎。不問馬。

しかし、孔子は馬を問わない。ましてや火事の責任者を咎め立てなどしていない。人の無事を問うのみであったことが、書き留められるべき事件であった、それに気づかせるには馬の価値に気づかせる必要がある。と同時に心情も想像させたい。

短い『論語』の章句である。小学校高学年、中学校、高校と、幅広く学習できる教材であり、その年齢に応じた作品との組み合わせで「不問馬」の重みを考えさせたいものである。なお、この章句にちなんだ落語「既火事」なども、庶民の生活になじんだ漢文を実感させる点で効果的といえる。

その他、2. で述べたようないわゆる中国モノはブームと言って過言ではない。そこから漢文への興味が開かれることは歓迎すべきではある。ただ、教材としてというよりも読書指導の一環として紹介すべきであろう。

日本文学ではないが、子どもたちに人気の高いファンタジーに、『ネシャンサーガ』（ラルフ・イーサーヴ作、酒寄進 訳）がある。

「第七代裁き司の謎」の巻の扉に次のことばがある。

昨晚、わたしは蝶になる夢を見た。
はたして今のわたしは、
蝶になる夢を見た人間なのか、
それとも人間になる夢を見た蝶なのか、
それがなんとも判然としない。
(中国のある思想家の文章より)

『莊子』の「胡蝶の夢」の引用である。芥川や中島のドイツ版と考えるとあながち誤りではあるまい。

昔者、莊周夢為胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志不與。知周也。俄而覺、則蘧蘧然周也。不知周之夢為胡蝶與、胡蝶之夢為周與。周與胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。

足の不自由な主人公が眠りにつき、別世界で別の名前を持ち、別人格として活躍する。様々な試練を克服するという成長譚はファンタジーの王道であるが、その主人公は、やがてどちらの世界の自分が本来の自分であるか分からなくなる。まさしく『莊子』に想を得て、生み出された文学言ってよかろう。子どもたちが楽しんで読める作品である。『莊子』への見方も変わるのではないだろうか。(岡本恵子)

2) 韻文の場合

【例1】「素朴な琴」(八木重吉) → 王維「竹里館」

このあかるさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐えかねて
琴はしづかに鳴りいだすだらう

「竹里館」(王維)

独坐幽篁裏	独り坐す	幽篁の裏
弾琴復長嘯	琴を弾じ	復た長嘯す
深林人不知	深林	人知らず
明月来相照	明月来たりて	相照らす

重吉の詩は短詩が多く、動物や植物、自然の情景を詠んだその詩は静寂な世界を生み出している。

「素朴な琴」は四行詩である。短ければ短いほどその内容は多様に想像される。琴というと優雅・優美なイメージがあるが、素朴と琴は結びつきにくい。それだけに印象深い。「秋の美しさ」は生徒に何を思い浮かばせるだろうか。紅葉だろうか。秋の美しさの中でしづかに鳴りいだす「素朴な琴」は、人間の心かもしれない。

王維の「竹里館」は輞川二十景の一景。ひとり奥深い竹藪にすわって、琴を弾いたり長く息を吐いたりする。深い林の中なので知る人もいないが、明月だけはさしこんできて、わたしを照らしてくれる。「琴」は七弦の楽器で、知識人が座右に置いた楽器である。十三弦の琴は箏という。「素朴な琴」の琴は箏である。

八木重吉も王維も詩の底には宗教的静寂さがうかがわれるが、直接には表現されていない。又、共に自然と融和した空間の静けさを感じられるが、「竹里館」では琴は人に弾かれ、「素朴な琴」では自然に「しづかに鳴りいだす」。つまり「竹里館」では「琴を弾いている人間」の有様が中心であるのに対し、「素朴な琴」では「琴」そのもののありように中心がある。

【例2】「なだれ」（井伏鱒二）→孟浩然「春暁」

峯の雪が裂け
雪がなだれる
そのなだれに
熊が乗つてゐる
あぐらをかき
安閑と
蓑をすふやうな恰好で
そこに一びき熊がある

春眠不覚暁 処処聞啼鳥
夜来風雨声 花落知多少

次は「春暁」（井伏鱒二訳詩）

ハルノネザメノノウツツデ聞ケバ
トリノナデクネ目ガサメマシタ
ヨルノアラシニ雨マジリ
散ツタ木ノ花イカホドバカリ

井伏鱒二について、「山椒魚」「黒い雨」などの小説を生徒は知っているだろうが、詩人の顔を持っていることは案外知らない。「なだれ」は早春の光景をのどかに描き出した詩である。実際の熊は恐ろしい動物だし、現実の雪崩も熊をのみこんでしまうだろうが、詩人はそれをゆったりとした風景に変えてしまう。詩人の想像力とヒューモアの力である。詩は『厄除け詩集』に収められている。

孟浩然是進士の試験を受けたこともあったが合格せず、故郷に帰り、自然に親しみ悠々自適の生活を送った。「春暁」はのんびりしたおおらかな詩である。そしてこのように朝寝坊できるのも役人仕事をしていないからである。王維、王昌齡、李白らと親交があり、そのおおらかな人柄ゆえ敬愛された。その人柄は井伏鱒二と通じるものがある。李白に「黄鶴楼送孟浩然之広陵」（七絶）があるのはよく知られている。

【例3】俳句→司馬遷「刺客列伝」（『史記』）

流れゆく大根の葉の早さかな 虚子
易水にねぶか流るる寒さかな 蕪村

風蕭蕭兮易水寒 壯士一去兮不復還

子規は熱心に蕪村の研究をしていた。虚子もまた蕪村に関心を持っていただろう。虚子のこの句は蕪村の本歌取りである。蕪村は荊軻の故事に触発されてこの句を詠んだ。歴史に材をとった蕪村の想像力の凄さがある。そして芭蕉の門弟凡兆に「渡り懸けて藻の花のぞく流れかな」がある。

虚子の句はこのような先行句を踏まえたものである。近代俳句は日本の近世の句を踏まえ、その近世の句は古代中国の詩と故事に触発されたものであることがわかる。日本の近代の十七字の世界の心情は、司馬遷の『史記』に通じているのである。（朝倉孝之）

5. おわりに

日本文学と漢詩・漢文の繋がりを軸に行われた授業実践は枚挙に暇無い。ただ、その多くは、たとえば『枕草子』と『白氏文集』であったり、芭蕉と杜甫であったりと、定番古文教材に取り込まれた漢詩・漢文を学ぶことで、日本文学への中国文学の影響がいかに大きいかを実感させ、そこから古文を見つめ直し、漢詩・漢文に親しみをもたせようとする方向での学習であった。

ただ、ときとして漢詩・漢文以上に古文が遠い現代っ子にとって、親しみを感じ、自分たちに繋がる文学の系譜や普遍的とも言える人間の営みに思いを致すためには、より近い作品にも目を向けさせるべきであると考えた。

本研究を始めて、改めて漢詩・漢文の影響の大きさを痛感する。世界中で翻訳され親しまれた漢詩・漢文という、自明のことに改めて感心さえしてしまう。

だからこそ改めて、今にふさわしい日本文学との関わりを考えるべきではないか。学習指導要領の改訂は、単なる復古を意図したものではあるまい。

この国の母語の書記言語は漢字仮名交じり文である。自明のように使っている漢字仮名交じり文が、今のような形になるまではいくつもの変遷があった。かつて文字を持たなかったとき、漢字・漢文との出会いは大きな衝撃であった。この瞬間から漢字との格闘が始まったのである。漢字・漢文はそこに人間の思想を包含している。漢字との格闘は、その思想との格闘でもあった。仮名が漢字から生み出され、漢字仮名交じり文によって思考している我々の日常の生活を思うと、この国と伝統的な言語文化を学習する根幹に漢字・漢文の学びを据えることは当然のことである。

本稿では、近現代の知的な創造や発想の根源に漢文の素養があったことを示した。あわせて現代の経済効率を求める時代の風潮の中で、人文学、ことに古典が軽視されることの問題点を指摘した。そのような観点から、生徒たちにとって漢詩・漢文の学習が親しみの持てるものにする一歩として近現代の文学作品（散文・韻文）と漢詩・漢文の結びつきを記した。

次年度は具体的な授業構想と指導案を提示したい。
（朝倉孝之・岡本恵子）